

夕顔の西の対、玉鬘の西の対

—— 源氏物語、しづのをだまき考 ——

村 井 利 彦

(一) 朧月夜の場合

「若菜」上巻に、光源氏が朧月夜と久しぶりに逢う場面がある。これは、女三宮への失望感が彼にそうさせたわけであるけれども、紫上はその光源氏を無視する。紫上は、光源氏が女三宮に失望していたと同様、光源氏に失望していたのである。

が、紫上は籬の緩んだ六条院の秩序にまで無関心であったわけではない。明石女御が出産のため六条院に帰ってきた機会をとらえ、同じ寝殿の障子一つ隔てた女三宮に初めて面会する。「我より上の人やはあるべき」。彼女は決然としていた。既に二人の帰趨は読者の側ではとくに決定していたのであるけれども、結果は予想通り鎧袖一触、女三宮は対面の前から屈服し、六条院のヘゲモニーを確立する。彼女は彼女を中心とする六条院秩序をたちまちのうちに恢復したのだ。この時、光源氏は妙におどおどし、幼いだけの女三宮に適切な助言を与えようにも与える術もなく、劇的だと思われる二人の対面の現場にいて差配することもしなかつ

た。彼は逃げたのだ。

朧月夜は、朱雀院の出家遁世で里の二条殿に帰っていた。あれは賢木巻巻末、密事の発覚した苦い思い出の場所である。今や自由の身となったその朧月夜の許に光源氏は逃げた。既に二人は「焼け木杭に火」を地でいって、女三宮に失望し紫上には疎まれた彼としては避難場所がそこしかなかったという事情もある。もしこの時彼が近場の明石や花散里に走っていたら、この段階で紫上を失っていただろう。とりあえず、嫉妬してほしかった紫上が無視した朧月夜のところを万般安全であったのだ。

さて、その焼け木杭に火がついた時に話を戻す。密事発覚の時から若菜巻上までおよそ一五年。二人は逢っていない。明石から三年を経ず帰還した光源氏は以前の光源氏ではなかった。このことをいち早く察知したのが、須磨明石流謫の原因者であった朧月夜である。彼女は、光源氏を見切り、一心ない朱雀帝の方を向く。そう決断した濔標巻以来、ずっとそうして、彼女は光源氏を振り返ることはなかった。

朧月夜が察知し見切った光源氏の変貌は、艱難汝を玉にするといつたとき俗諺では解釈できない。光源氏を突き動かすもつと根源的な動機があつて、その変貌は、姉の弘徽殿大后の政治をものもしなかつた朧月夜の恋愛至上の行為に見合わず、彼女にとつては到底受け入れがたいものであつたと考えられる。今この問題に深入りするつもりはないが、光源氏のこの豹変は、朧月夜の態度と同様、若菜巻まで変更がない。少なくとも朧月夜の目にはそう見えたはずだ。

平行状態の二人が再び交わることとなつたのは、「昔を今」にした光源氏の変化が原因である。そもそも女三宮を受け入れた動機が「藤壺に似ているかもしれない」であつた。藤壺を実現しているはずの紫上が傍にいなから、この発想をする光源氏を前にして、読者が自然に導かれる結論は、「紫上は藤壺ではない」ということであろう。紫上がとつくに藤壺を離れ自己を確立していた事情は、女三宮対面時の彼女の行動に如実である。光源氏はこの時、古い藤壺の時代に取り残されていたのだ、ということもできる。

その光源氏の、よるべを失いさまよう魂が、藤壺時代の人である朧月夜に向かつたのは自然であろう。受け入れた朧月夜も、自分の世界に光源氏が帰還したとの認識が心底にあつたのではない。作者も、このあたりの演出にぬかりはなく、対面の場所を花宴巻の藤の木周辺に設定している。「花はみな散りすぎて、なごりかすめる梢の浅緑なる木立、昔、藤の宴したまひし、このころのことなりけりかし、とおぼし出づる」と書き、光源氏自身に

も「この藤よ、いかに染めけむ色にか。なほえならぬ心添ふにほひにこそ。いかでこの蔭をば立ち離るべき」と言わせている。読者には、「扇を取られてからきめを見る」という光源氏に対して溜息でもつて朧月夜が自己の位置を示した花宴巻末の場面が思い起こされよう。これは、「昔を今に」という若返りの暗示でもあつた。「若菜」巻の、恰好の事例である。

ついでながら、その昔の朧月夜の大胆な行爲も思い出される。弘徽殿大后が考えた尚侍就任という便法で朱雀院の後宮、それも大后に譲つてもらつた弘徽殿に入る。二心なく彼女を愛する朱雀院が五壇の御修法という公務にかりつきりであつた、その隙をついて大胆にも彼女は光源氏を誘ひ、二人が初めて逢つた弘徽殿の細殿で密会を楽しんだ。同じ場面を繰り返す、あの時の小さな波動がここに来て巨大な波となつて、もはや取り繕うことができぬ現実となつていく。

若菜巻で朧月夜を書いた作者の意図は、光源氏の昔を求めるところと悲しい孤独を、老年の入り口である四十歳に、浮彫して見せるというような軽い話ではない。

(二) 朝顔の時

光源氏の「昔を今に」の心理がいつから本格的に起動したのかというと、薄雲巻における藤壺の死の時点である。伏流はそこに発し若菜で始末におえない噴流となる。その細流が顕在化した最初の事例は朝顔である。薄雲巻の次の巻。朝顔を正面から語る朝

顔巻においてである。

そもそも朝顔は、光源氏の青春時代を彩る重要な人物であるにもかかわらず、禁欲的にしか語られていない。帚木巻では、空蟬の女房たちの噂話。光源氏が朝顔の花を贈った場面は源氏物語に書かれていないが、大向こうを唸らせる当時最大級の話題であつたらしい。葵巻では、六条御息所の陥つた恋の泥沼を嫌い、プラトニックな恋を選択。「逢わない愛」を確立している。賢木巻では、賀茂斎院就任。神聖にして侵すべからざる人となつた。彼女の人生選択にふさわしい役どころであろう。その朝顔との文通をやめようとしない光源氏の行為は、政治問題化し、須磨落ちの理由の一つにもなっている。薄雲巻では、父の式部卿が死んでいる。彼女が斎院を辞める時がきた。ざっと以上が彼女について語られた全てである。

その地味であるはずの彼女が読者に強い印象を残すのは、彼女の人生選択の対極にある人物達のせいである。なかならず六条御息所。六条御息所の泥沼の人生が、のたうちまわつて物の怪の如く描かれれば描かれるほど、朝顔の清浄さが際立つ結果となる。

六条御息所の他には藤壺、葵上、朧月夜。彼女は朝顔の反定立であつて、紫上を除くほとんどの登場人物の逆照射を朝顔は一身に受ける。だから彼女は反定立人物群の描写量と等量の想像力を読者から獲得し、牢固たる自己を確立する。描かずに描く。これは源氏物語の構造的筆法で、物語の随所に見られる技法である。

さて朝顔巻。光源氏はこの時、朝顔を甘く見ていた節がある。桃園邸訪問第一回。叔母の女五宮と簀子で挨拶を交わし、西の対

にゆき御簾をくぐる。この時彼は、後の朧月夜状態に勞せずしてなると確信していた。朝顔のいう穢れ論など科戸の風にはひとたまりもあるまいと高をくくつていたのである。が、朝顔は巖のように固く重かつた。

むなしく帰る光源氏の後ろ姿に、作者は落葉の音を配している。こころにくい演出ではないか。帰つて、屈辱で眠れぬ光源氏が朝顔を迎える。彼の眼に、咲く朝顔が一輪映る。その朝顔を折り、朝顔に贈る。おそらく、この場面が書きたくて、作者は帚木の噂を噂にとどめ、ここまで引つ張つたのだと思う。昔を今に。光源氏の切り札である。

しかし、この時、光源氏は怒っていて、いつもの余裕に欠けていた。あいにくなことには肝腎の時節も失つていて、その朝顔の花が、昔の朝顔の花ではなかつた。十代の少年が贈つた朝顔は咲き初めの勢いのいい朝顔であつたはずである。今回の、中年男の朝顔は、初冬落葉の頃の、からくも残つた朝顔の最後の一花である。そして、光源氏の、その朝顔に添えた歌がいかにもまずい。

見しをりのつゆわすられぬ朝顔の花の盛りは過ぎやしぬらむこの露骨な「似つかはしき御よそへ」が、朝顔の人生選択を塗り固め、仕上げてしまうことになる。彼女は昔のままに生きたかつたのだし、自分が昔のままではないことをも知っていた。光源氏に今、彼女の生きるよすがを見破られてしまった以上、彼女が昔のままに生き、光源氏の愛を絶対的に護持するには、光源氏に逢

わぬこと以外に可能性はなかった。だから、彼女は女五宮以下あらゆる周辺女房および世間の願望を押し切り自己を貫いたのである。

作者も、この朝顔を応援しているように見える。光源氏の、紫上の不安ものかわ強引な二回目の桃園邸訪問をほとんど喜劇仕立てで語っている。邸の門の鍵が錆びて開かないとやって、邸のイメージを桃源郷から一気に末摘花の常陸宮邸に落とす。上品であったはずの女五宮に軒をかかせ、あまつさえ源典侍を登場させて老醜の限りをつくしてはいないか。

この前段階で、光源氏も悟つたらしく、朝顔の西面に移動した時はすでに諦めの境地に達している。「一言、憎しなども、人づてならでのたまはせむを、思ひ絶ゆるふしにもせむ」と、伊勢に対する平中状態になっている。光源氏の人生空前の屈辱である。絶後ではないけれども。朝顔は「昔に変わることはならずなむ」と答えて、二人の関係を「昔」に戻し、「昔」に封印している。実に潔い。

紫上は、この時、事態を把握できぬまま捨て置かれていて、思案投げ首不安の中にいた。が、ともかく光源氏は彼女のもとに帰ってきた。自力ではなく他力で。ということは朝顔の不安は紫上のなかに保留されたということの意味する。

庭におりた童女が雪山を作った夜、寒い月明かりの中で、光源氏が「今はさりともし心のどかに思せ」と紫上を慰めつつ、藤壺のこと、朝顔のことを懐かしく語り、明石や花散里にも言及する。

光源氏のこの時期における女性評価列伝。一仕事終えた後よくや

る光源氏の癖である。

この時、紫上は朧月夜を話題にする。唐突な印象はまぬかれな
いが、とにかく紫上は朧月夜を口にし、光源氏の朧月夜評価を聞
いている。朧月夜の評価はかんばしいものではなかったが、ここ
でわざわざ朧月夜を紫上に言わせたところは、若菜における彼女
のとった態度と行動を思う時、なんとも暗示的に見える。紫上の
学習の方向性を既にこの時作者が示唆していると考えられるから
である。

(三) 玉鬘の位置

朝顔は昔の朝顔ではなかったが、藤壺時代を生きたいという光
源氏の思いは、その後の玉鬘の存在でかなえられることとなる。

彼女は母親夕顔の死後数奇な運命をたどり、北九州の地で青春
時代を過ごす。かの地で神も政府も恐れぬ野蛮な大豪族の求婚に
周章狼狽、夜逃げ同然の恰好で都に帰る。そして長谷寺観音の霊
験それかあらぬか、父でもない光源氏の許に引き取られることにな
った。この時玉鬘二十歳。母親の死んだ年齢である。というこ
とは、光源氏には玉鬘は夕顔の連続そのものであった、というこ
とになる。彼は忘れられない夕顔を一世代後になつて手に入れた。
玉鬘巻以下真木柱巻に及ぶいわゆる玉鬘十帖は、光源氏が死んだ
はずの夕顔とともに生きた時間である。彼は、玉鬘のお陰で藤壺
時代に居残れた。昔が今となった時間である。

作者が、この光源氏の屈折した、無理ともいえる時間を可能と

する装置をいかに構築しているかに話を移す。

夕顔が死んだのは、某院である。その某院の、さらに何処が現場かということに関しては、読者はほとんど注意を払わない。物の怪の正体や完全犯罪のスリルに気がいつてしまうからである。が、作者は「西の対」であると明確に書いている。

某院が源融の六条河原院を意識して書かれている以上、位置も六条と心得るのが自然である。光源氏と夕顔は、あの朝、五条から南に牛車を走らせたのである。「いざ、ただこのわたり近き所に」と言った光源氏の言葉に符号する。某院は、光源氏が何時でも自由勝手にしてよい施設であったと考えられる。末摘花巻で、常陸邸より巨大であることが確認されるから、この広大な某院がまだこのように荒廃していない時代、ここにさんざめいていた貴族たちを想像する作業ははなはだ刺激的である。彼らはおそらく、光源氏に連なる、今は姿を消した光源氏の一族、だろうが。

玉鬘を迎え入れた光源氏新造の六条院は、六条御息所の一町を西南に持つ四町の結構であった。しかも六条。読者当然の想像として、六条院造営に際しては、六条にあった某院も六条御息所邸のごとく取り込み利用したと考えられる。実際に、少女巻本文には「もとありける池山」の利用がさりげなく記されている。六条院の規模に相当する「池山」を有する古い施設を活用しその古い施設の上に新しい施設、つまり六条院を造営したのである。古い施設は某院に違いなからう。

昔光源氏と夕顔が愛の逃避行をした場所が、光源氏との愛に田の農夫のようにもがいていた六条御息所邸の築地と接するの東隣

北隣とは考えにくいから、そこは六条御息所邸から一番遠い町、東北であろうと思料するのが自然である。ならばすなわち、某院は花散里の町ということになる。玉鬘は、その花散里の丑寅の町、しかも「西の対」に迎え入れられたのである。このことは、玉鬘巻に丁寧に描写されている。

住みたまふべき御方御覧するに、南の町には、いたづらなる対どもなどもなし、勢ひことに住みみちたまへれば、顕証に人しげくもあるべし。中宮のおはします町は、かやうの人も住みぬべくのどやかなれど、さてさぶらふ人の列にや聞きなされむと思して、すこし埋れたれど、丑寅の町の西の対、文殿にてあるを他方へ移してと思す。あひ住みにも、忍びやかに心よくものしたまふ御方なれば、うち語らひてもありなむ、と思しおきつ。

玉鬘は、夕顔の死んだ位置にいて、夕顔の命を源氏物語に繋いでいる。作者は読者をそう誘引しているのだと思う。

源融の六条河原院という大過去。祖父たちがさんざめいた某院という中過去。そして夕顔と過ごした光源氏青春時代の小過去。六条院という光源氏の現代の住まいは、三層をなす過去の基盤の上に築かれていて、唯識論という阿頼耶識のような、地下に過去世を蓄える蔵を持つ構造となっている。特に花散里の町はそうである。玉鬘の住む西の対には遣水が流れていて、そこには空を覆うような檀があったことが篝火巻に書いてある。あの檀は、融の

大過去に根を張って今に及んでいることは既に述べたことがあるから繰り返さない。またこの町の主人である花散里からして、橘のイメージを持つ昔なつかしい人であった。花散里がいて玉鬘がいる六条院丑寅の町は、過去に生きる光源氏の志向を支持する多重安全装置であり、いくなれば六条院の秘密を蔵する奥の院であろう。

光源氏は、玉鬘のいる西の対の庭に、大和のも唐のも問わず撫子を一面に植えている。常夏巻。読者には、雨夜の品定めの小過去が思い出されよう。頭中将の語る夕顔は常夏で、玉鬘は撫子だった。常夏も撫子も実態に変わることはない。常夏は撫子であり撫子は常夏。光源氏は玉鬘の空間を夕顔の小過去に戻し、死んだが生きている夕顔の時間を生きようとしたのである。

紫上は、この玉鬘事件の本質を把握しかかっている。光源氏が玉鬘を話題にした時、紫上はさりげなく、玉鬘が光源氏を信じる危険は自分の経験から理解できると胡蝶巻で光源氏に言っている。彼女は自分の少女時代のことを思っているのである。この「南の上の御推しはかり事」が光源氏のトゲとなって彼に玉鬘との結婚を諦めさせたのであるから、朝顔事件は紫上の学習を深め、彼女自身の強化に資したことになる。紫上は作者のラインに乗っているのである。

(四) 玉鬘の再生

紫上以上に愛するものでなければ意味がないという理由で玉鬘と

の結婚を諦めた光源氏であったが、自分の世界の外に彼女を出す気はさらさらなかった。玉鬘が内大臣の子であるにもかかわらず、そう光源氏は考えている。

行幸巻における、光源氏の、玉鬘をして冷泉帝の尚侍とするこ
とによる抑留戦術の手並みは水際立っている。

まず本人には大原野行幸見物をさせる。行幸の行列はとりもなおさず全貴族の展示にはかならない。光源氏はわざと参加しなかったから、光源氏と異なることのない冷泉帝が断然光る結果になるのは当然であろう。玉鬘の心が帝に傾く。実の親内大臣をはじめとしてその他求婚者たちは、玉鬘の帝讚嘆の目移し効果で幻滅の対象となるのみである。螢兵部卿も髭黒も帝に比べれば土塊同然。この時、光源氏の勧める尚侍という地位は玉鬘にとって断然の魅力となったのである。

次いで内大臣に真相の告知。選んだ場所が光源氏の手放しの礼讃者大宮の前だから、最初から光源氏優位である。相手の内大臣にしても根は光源氏ファンであったから、久しぶりの対面で興奮していた。さらに光源氏が前振りに述べた「翼賛の功」を耳にし、多分須磨訪問の往時を思い出したのであろう、我が意を得て舞い上がっていたから、本題の玉鬘の真相など、もはや聞くに足らぬ小事にすぎなくなる。この時から彼は光源氏の意のままに生きることにまた生きがいをみだして、玉鬘に関することは光源氏の御意のまま、ということになる。善良で胡乱な内大臣は一瞬にして光源氏に籠絡された。こうして、玉鬘の尚侍就任の環境は、たちまちのうちに整ってしまったことになる。見事な光源氏の政

治である。

この端正美麗な環境を破つたのは、髭黒の野蛮ともいえる行動力である。かれは実の親である内大臣の了解をとりつけるや石山観音の霊力と弁の人間力を得て六条院に侵入し玉鬘との結婚に成功する。

作者は、藤袴巻巻末で焦る求婚者たちを描き、次の真木柱巻冒頭で結果を書くのみで、六条院の狼狽ぶりは読者の想像に任せている。任せられた読者は、事の真相解明に向かわざるを得ない。なぜ髭黒は突撃したのか。そうするにはそれ相当の理由があるはずだ、と。

髭黒の胸の内を考える時、暗黒時代の藤壺や光源氏の心理が参考になる。我が身をなきになしても東宮の保全をはかる。東宮を「前坊」にするものか。二人は炎の意志でそれを貫いた。髭黒の現在は、二人の過去に似ている。髭黒の妹女御は朱雀院の後宮で唯一親王を生んだ。現在東宮であるけれども、まだ元服前で幼い。女御の地位とて、尚侍にすぎない朧月夜にはるかに及ばない。髭黒の政治的地位にしても、それ相当に高いとはいえまだ大将で、東宮の後見には心もとない。彼の後援としては妻の父である実力者式部卿が存在し心丈夫に見えるが、その肝腎の妻が物の怪付きで始末におえない。別れたい。別ればほとんど孤立無援。髭黒は起死回生策が必要だったのである。東宮保全のために。

髭黒は光源氏を目指した。妻を捨て式部卿を捨て絶対の実力者光源氏を目指したのである。狐師の懐に入る窮鳥同然、彼はほとんど目を瞑って六条院に突撃した。この中央突破作戦は髭黒の想

像以上の成功を収める。作者の言う石山観音の霊験、「心浅き人のためにぞ寺の験もあらわれける」は言い得て妙である。

髭黒の感激を言えば、玉鬘は近勝りの美女だった。諦めていた処女性も健在で、何よりも光源氏の玉鬘に対する愛が底知れぬ程に深かったということである。おそらく彼はこの突撃で光源氏に疎まれ睨まれても実の父内大臣の勢力圏には踏みとどまれるという算段であつたらう。が、結婚後も衰えぬ光源氏の玉鬘に対する強い純愛を奇貨とし、むしろ光源氏の側近になるという願つてもない道筋を髭黒は発見したので。そのことを如実に示す場面が若菜巻にある。

光源氏が四十歳になる。早速に四十賀を申し出る子供や妻たちの要求をことごとく拒否する。紫上、夕霧、秋好中宮、そして冷泉帝の願望を退けるのだ。彼は老いらくの来る道に入りたくなかつたのである。

が、玉鬘は違った。正月、用意万端整えてづかづかと六条院にやってくる。結婚後たてつづけに生まれた二人の年子も連れてやってきて、有無を言わず誰よりも早く光源氏四十賀をやってしまった。彼女はこう振舞つても大丈夫という絶対の自信があつたし、実際光源氏も玉鬘のなすがままに従いむしろ喜んでた。光源氏は、玉鬘が内大臣の娘であることよりも、髭黒の妻であることよりも、自分の「娘」として行動してくれたことが単純に嬉しかったのである。しかも、玉鬘は「孫」まで連れてきて祝ってくれた。見せてくれぬ夕霧とは大違いだ。

この玉鬘の嬉々たる行為を許し、そのいちいちことごとくを差

配していたのはいうまでもない髭黒である。彼は、光源氏四十賀の盛儀でもって、玉鬘は光源氏最愛の「娘」であると満天下に宣言し、自分は光源氏第一の側近であることを演出して見せたのである。実際、この巻の中盤に描かれる、六条院の最後の栄華の場であろうと思われる女楽の場面を見るとよい。髭黒は夕霧とともに可愛い「孫」を補助の童として提供している。夕霧と同格の扱いはある。また、玉鬘の実父太政大臣の致仕の後太政大臣にまでのはりつめたことが竹河巻で確認される。髭黒の政治は、行幸巻の光源氏の政治に劣ることはない。

彼は、昔を今にする光源氏の夢を一旦破ったが、間を置くことなく光源氏の破れた夢を自分の政治力で修復し完成させている。

光源氏の感激、推して知るべし。光源氏は、髭黒と玉鬘のお陰で「祖父」となり、晩年の自分の立ち位置を得たのである。彼は死後の遺産相続人の第二位に玉鬘を指名している。

(五) 追悼の形

紫上は三七歳で一旦死ぬ。作者がわざわざ年紀の無理を犯してでも三七歳を強調して見せたのには理由がある。紫上の目標であった藤壺が三七歳で死んでいるからである。

すでに触れた朝顔巻の、冬の月夜の場。光源氏が紫上を見る。「外を見出だして、すこしかたぶきたまへる」紫上は藤壺の「面影」を写し取っていた。あの時彼女は既に藤壺を実現していたのだ。にもかかわらず、見てきたように、光源氏が藤壺の時代に拘っ

たのは、紫上が藤壺と違っていたからにはかならない。その小さな違いは時とともに増幅拡大し、紫上は紫上そのものになっていったのだ、と考えられる。紫上が藤壺の三七歳に達した時点。幼かった女三宮が女盛りを迎え、ほとんど紫上に並び、読者にはもはや抜き去ったかに見えた若菜巻下の女楽の時。作者は紫上を発病させ、さらには一旦の死を与え、彼女が身にまどってきた藤壺の衣を脱ぎ捨てさせた。既に藤壺から相当に乖離していた紫上の、これは仕上げであろう。

先に紫上の失望に触れたが、彼女は三七歳の時点で藤壺を捨て、同時に藤壺および藤壺時代を離さない光源氏を見切り見限って捨てたのだと思う。以後、彼女は光源氏の傍にいて光源氏に同情しつつも光源氏から徐々に離れていき、作者の用意した八月十五夜に帰天する天女となる道に行くことになる。

玉鬘はどうか。光源氏も髭黒も死んだあと、作者は竹河巻を一巻たてて、彼女の人生を総括している。しかもその総括の後、宇治十帖に入ってゆく。だから、紅梅巻の大納言の「端が端」慨嘆同様、玉鬘の総括の重要性、宇治十帖への影響力は無視されてよいものではない。

髭黒が死んで、髭黒政治の積悪のせい、玉鬘一族への世間の目は冷たい。が、長女の大君の魅力は、玉鬘に夕顔を加算した程のものであったらしい。帝や東宮の熱烈な求婚がある。しかし、玉鬘は光源氏一族をはばかり競合を避ける。選んだ相手は、祭の後でしかない冷泉院であった。長女は予想通り愛を専らにし、まづ皇女を産み、次いで皇子を産んでいる。ますます祭の後である。

玉鬘はなぜ祭に参加しなかったのか。なぜ夕霧との競合を回避したのか。そしてなぜ冷泉院なのか。答えは一つしかない。

彼女は光源氏の「娘」であったからである。

「娘」は「父」のかつての夢を、自分の代で実現させた。冷泉院に尚侍として玉鬘を抑留する。玉鬘は、自らの尚侍の職掌を長女大君に譲り、光源氏の昔を今にしたのだ。結果は大君にとっても玉鬘にとっても辛いものとなってしまったけれども、結果など玉鬘にとってはどうでもよかったのかもしれない。彼女は光源氏を選び、断固として「娘」の行動をしままでだ。三国志の筆法で言えば「死せる光源氏、生ける玉鬘を走らす」構図であろう。これ以上の光源氏追悼は考えられない。

竹河巻巻末で、中納言就任の挨拶に来た薫に冷泉院後宮のとりなしを頼んでいる。「姉」から「弟」へのくだけた依頼。「弟」は「姉」につれない返事をする。「姉」は苦笑いするばかり。「姉」と「弟」という二重の虚構を知る読者にはいたたまれない場面である。

「姉」の虚構は、世間周知のもので、彼女の行為はその上にたった窮めて個人的な営為であり、世間はともかく事情を知る源氏物語読者の支持は得られよう。もし支持が得られれば、支持が得られる分だけ光源氏の追悼の量が増大してゆく。その意味で玉鬘は世間的には不幸であったかもしれないが、生前も死後も血脈を超えて光源氏とともに生きた生涯を完結しているといえよう。いくなれば、紫上と明石中宮の関係を、光源氏との間に結んでいるということになる。

一方、「弟」の薫はどうか。彼は、出生の秘密を宇治十帖の第一巻で知らされている。その知らされ方も通常の告知ではない。証拠の書類一切合財が入った袋を渡されて、有無を言わず知らされている。

事の真相は彼と袋を死守した弁しか知らない。玉鬘も紅梅大納言も、宇治の姉妹も匂宮も知らない。明石中宮に至ってはこの「弟」が自慢の種である。かれの行為は、彼女にとって価値そのもののように見えている。夕霧はどうか。柏木巻や横笛巻のあたりでは真相に肉薄しているように見えるが、宇治十帖に至るや、真相究明の情熱などなくなって、匂宮と同等の、下にも置かぬ扱いに終始する。

彼はこの世間の誤解に身を委ね、告白懺悔など思いの外。誤解を守る、これが彼の行動原理である。だから、彼は世間の期待に忠実なのだ。期待に忠実である限り、世間は彼のスキヤンダルなどに興味はなく、むしろ積極的に目を逸らしてくれる。薫の心理はほとんど罪を犯した者のそれであろう。それはまた、罪の子である薫に相応しい。

彼が死守する「誤解」は、彼が光源氏の「子」であるという誤解である。彼は、光源氏の「子」として生きること汲々としているように見える。それほど死してなお巨大な光源氏の傘が鮮明であったわけだから、薫の優柔不断で小心翼翼とした生きざまは全体として眺めれば光源氏の追悼に充分なっている。その点では竹河の玉鬘に行為に似ていなくもない。

似て非なるところは、依って立つ処にある。玉鬘の場合は彼女

の意志。誤解などどこにもない。正解から出発し光源氏の世界に自力で帰還している。彼の場合はどうか。最初から最後まで誤解頼みで、正解をとことん知っているにもかかわらず、誤解を正解だと韜晦しているのみである。無常な世間に軸足を置いた全くの他力の世界で、玉鬘や紫上とは極めて異質。累卵の危うき世界でもある。早晩彼の欺瞞は破れ、野ざらしの未来を待つのみであろうかと推測される。玉鬘は光源氏の過去の傷を修復した。一方の薫は、このまま推移せんか、光源氏の傷を拡散するばかりである。彼自身がその動かぬ証拠であるからである。

作者は、無常な世間が薫の観方を変え薫を見限る前に、源氏物語の読者を見限らせようと、薄皮をいちいち剥いでゆくような丁寧さで宇治十帖を描き進めている。この十帖はいうなれば薫の静かな墜落史であり、薫が光源氏の傷の入った「袋」を背負って源氏物語世界から出てゆく物語である。これは作者による光源氏追悼であろう。このあたりのことは稿を改めて述べることにする。

(注) 引用した源氏物語本文は阿部秋生校訂『完本源氏物語』（小学館）に依っている。